

ようやく春の陽気に包まれるようになり、大津市内の桜のつぼみは大きく膨らませています。あと数日もすれば開き出すのではないかと、待ち遠しい春の移ろいとなっております。この良き日に、ご来賓の方々ならびに保護者の方々にご臨席をいただきまして、平成 29 年度の入学式を執り行うことができますことは、私ども教職員にとりまして、誠に大きな喜びといたすところでございます。

高いところからではありますが、最初に、ご来賓の皆様方にお礼を申し上げたく存じます。公私ともどもご多用にもかかわらず、入学生の前途を親しくお祝いしていただくことになりまして、誠にありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。また、保護者の皆様には、心からお祝いを申し上げます。晴れやかな門出のご様子に、お喜びもひとしおのことと存じます。誠におめでとうございます。

さて、新入生の皆さん、このたびのご入学、おめでとうございます。今年度は、321 名の方々が入学されました。新たな学びに向けて、心から歓迎いたします。本学の母体は純美禮学園と称し、実に 99 年の歴史を有しております。来年度、平成 30 年度には 100 周年を迎えるという伝統ある学園であります。この学園のもと、短期大学は 1970 年に滋賀女子短期大学としてスタートしています。2008 年には男女共学の短期大学に移行し、本年度でもって 47 年目を迎えるに至っています。

皆さんをお迎えするにあたり、お話をしたいことがあります。最初に、本学の教育理念と教育内容についてです。本学の建学の精神は、「心技一如」いう 4 文字で表わしています。この精神は、学園創設者の中野富美先生の教育方針を受け継いでおります。「心技」の心はこころの「心」であり、こころの働きとしての品性を表しています。「心技」の技はわざの「技」であり、生きる術(すべ)としての能力を指しています。私たちが備えるべき心と技、こころとわざは車の両輪のごとくであり、品性を養う人格教育と生きる術を高める実学教育を併せ持つてこそ、まことの教育が実現できるということを意味しています。この建学の精神のもと、本学では教養教育をベースに、実践的な専門の知識と技術を培い、社会に貢献できる若い人たちの育成に努めているところであります。

本学における学びの内容についてですが、時代の要請に応じた実学教育であります。実学とは、実社会に出て、役立つ知識や技術を身につける学びのことを指しています。本学には 3 つの学科、生活学科、幼児教育保育学科、ビジネスコミュニケーション学科の 3 学科があり、それぞれに学ぶ対象は異なりますが、いずれの学科とも実社会で対応できる教育に取り組んでいます。特に、関連する免許や資格の取得に向けては、しっかりと学んでくださるよう願っています。

次に、入学にあたって、ぜひとも心に留めてほしいことがあります。それは、「自分の足でしっかり歩いてほしい」ということでもあります。このようなことをいいます背景には、今の教育がエスカレーター的であるとする見方があるからです。この見方を聞いた当初は、首をかしげることになりましたが、よくよく考えてみますと、理解できないことではないように思われます。それは、今の学校教育が知識の習得を主たる目的としています。言い換えれば、知識教育を系統的に、段階的に進め、知識をより多く記憶できる人たちを育てようとしているきらいがあります。

小学校に入学したら、2 年生に向けてエスカレーター的に運び、次に 3 年生に向けてとなります。そして、6 年間のエスカレーターを終えると、次の中学校 3 年間のエスカ

レーターに、そして高校3年間のエスカレーターにということになります。余程のことがない限り、途中下車することはありません。このエスカレーターの機構のいいところは、与えられた、必要なことをしていれば、高いところに運んでくれるということです。じっと乗っていれば、転ぶ心配がありません。むしろ余計なことを考えたり、余計な行動をしない方がよいということになります。よくないところは、友だちと面と向き合っていないので、前後にいる人たちのことは特に気にする必要がありません。ましてや、知らない人と口をきくなど、考えてもみないことになります。ですから、人との関わりがあまり上手でないといわれても仕方がないように思われます。

ほとんどの学校は、こういった知識教育だけでは不十分であるということがわかっていますから、実際にはいろいろと工夫をして教育を展開しています。しかしながら、小さい頃から知識が有用であると教えられていますので、経験的な学びを軽視しがちになります。その結果、感覚を養う教育体験や、手仕事するような生活経験よりも、本を読んで知識を得る学びの方が高級な生き方であるように錯覚しています。このような教育の側面を垣間見ると、何か不自然で、何か不健康であるように感じざるを得ません。しかし、それよりも問題なのは、エスカレーターを降りたら、どうしたらよいかわからなくなって、降りたところで立ち止まってしまうということにあります。

そこでですが、皆さんにとって、これからはどのように歩けばよいかなど、共通的な歩き方はありません。それぞれが自分の足で、試行錯誤しながら歩いていかないとけません。言い換えれば、自分で考え、自分で判断し、自分で行動するという、自立した歩みが求められているのです。そのことは、自分自身に関わることばかりではありません。選挙権の年齢が「18歳以上」に引き下げられたということを含めて、広く社会の一員としても、必要になっていることになります。そういう意味では、ここでいう自立する歩みは、支えられてきた歩みから、支える歩みへと転換することを指しています。この支える歩みへの転換、胸に刻んでいただきたいと願っています。少なくとも、自分の足で自分の道のりにある階段を上っていきます。その過程では、つまずいたり、こけたりして、傷ついて歩けなくなったりもします。苦勞することが出てきます。それが普通なんです。そうして、本当の意味での生きる力を備えていくことになります。

心に留めてほしいことが、もうひとつあります。それは、これからの歩みにおいて、「心の窓を大きくしてほしい」ということでもあります。私たちは、これまでに一人で生きてこれていませんし、これからもそうです。生涯にわたって人との関わりの中かで生きていくことになります。人生で最も難しいのは、ひよっとすると、人との関わり方かも知れません。私たちは、ややもすると、自己中心的な気持ちが強くなります。その結果、相手への思いやりを含めて、周りに対する配慮ができなくなります。この自己中心的な考え方が、心を狭くし、心を小さくし、そのことによって心の温かさを失ってしまいます。これに対して、大きい心の持ち主は、自分の立っているところから周りを見渡すことができ、その見方が広がっています。その結果、いろいろな立場の人たちの存在を認め、いろいろな考え方を受けとめられるようになります。

そこでです。実社会では、そこで関わる人たちとの向き合える力が求められます。この向き合える力というのは、いろいろな立場の人たちや、いろいろな考え方の人たちを受け止められることが基本となります。この受け止められることが、温かく対応できる

という大切さにつながっていきます。数年先の実社会を意識し、温かく対応できるように、心の窓を大きくして友人や知人と関わってください。こういった力は、こういった感性といった方がよいのかも知れませんが、いろいろな人たちと向き合うことによって磨かれていくこととなります。

それでは、入学される皆さん、縁あって、ここ大津のキャンパスで一緒にすることになりました。ここでは、教職員、そして友人との新しい出会いがあります。この出会いを大切にしながら、それぞれに抱く想いに向き合ってください。短期大学は2年間という短い修学期間であります。とどまっているわけにはいきません。それぞれの想いに向けて、一歩、一歩、踏み出してください。入学された皆さんの元気あふれる学びを期待し、学長のお祝いの言葉といたします。

平成29年4月4日

滋賀短期大学学長 佐藤尚武